

## 意思決定理論を用いた心的内容についての説明：選好を基礎とすることは適切か？

中谷内，悠  
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4150380>

---

出版情報：哲学論文集. 56, pp.41-56, 2020-12-15. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# 意思決定理論を用いた心的内容についての説明

— 選好を基礎とすることは適切か？ —

中谷内 悠

はじめに

この論文では命題的態度の内容が何によって、どのようにして決定されるのかという内容決定の問題に答えることを目的とする。そしてこの問題に根元的解釈を通じてアプローチする。心的なもの全体論にとつて最大の困難は、心的内容がどのようにして決定されるのが説明できないように思われるところにある。これに対して、意思決定理論を利用することで、心的内容が全体論的に決定される方法についてうまく説明できることが示されている。しかしながら、意思決定理論では、内容がすでに特定されている選好に依拠しており、そのような選好を内容を決定するための基礎とすることには問題があるように思われる。これに対してデイヴィドソンは、内容が特定された選好のかわりに、未解釈の文に関する選好というある種、特殊な選好に依拠した意思決定理論を用いることで、基礎に関わる問題を回避しながら心的内容の決定を理解できると主張する。デイヴィドソンのアイデアは巧妙ではあるものの、それでも内容決定の基礎に関わる問題を抱えているように

思われる。この点を根元的解釈に関する考察を通じて最終的に明らかにする。

## 1. 内容決定と根元的解釈

この論文で取り組むのは内容決定の問題である。それは命題的態度の内容が、何によって、どのようにして決定されるのかという問題である。これは、命題的態度の個別化の問題とも呼ばれる。この問題は、命題的態度の内容がどのようにして知られるのかという認識論的な問題とはひとまず区別される。内容が何によって決定されるのかと問うとき、ここでいわれている決定関係は、形而上学的な決定関係であり、ここでの問いは形而上学的な問いなのである。

そして、この論文では根元的解釈を通じて、内容決定の問題に答えることを目指す。根元的解釈とは、例えば、未開の地で知らない民族に出会った場合に彼らが話す言葉や、彼らの考えについて解釈する場合のように、ある人が使う言葉の意味や、信じていること、欲していることについて何も知らない状況で、その人の言葉の意味を解釈するというものである。このように翻訳を全く手していない状況で、解釈者が観察によって知ることができるような手掛かりをもとに、どうやって言葉や心的状態を解釈していけるか考えることを通じて、言葉の意味や、信念や欲求の内容の形而上学的な決定関係が明らかにされる<sup>(1)</sup>。

デイヴィドソンの場合、根元的解釈を通じた考察はあくまで言葉の解釈がメインとなっている。つまり、言葉の意味は何によって、どのようにして決定されるのかという意味決定の問題に答えることがメインの課題である。しかしながら、デイヴィドソンの考えでは、言葉の意味は、その人の心的状態の内容と、相互依存的に解釈されるものなので、言葉の意味の解釈理論は同時に心的内容の解釈理論をともなっている。そして、彼の解釈理論は、心的内容決定の問題に答えるうえでも重要な進歩をもたらすものである。というのも、内容決定の問題に答えるうえで、心的内容が全体論的に決定されるといふ事

実は困難をもたらすように見えるが、彼の解釈理論はまさにその点を解決しているように思われるからである。それゆえ、デイヴィドソンの解釈理論を、内容決定の観点から詳細に捉えることには価値があるように思われる。

## 2. 心的なものの全体論

まずは心的内容が全体論的に決定されるという点について説明し、その点によって、内容がどのようにして決定されるのかを説明することが困難なものとなることを確認する。ここで関わってくる全体論は、ある行為者が何を信じ、何を欲するかが決定される時、それら個々の信念や欲求がひとつずつ決定されるのではなく、信念と欲求の体系全体が同時に決定されるという考えである。

この意味での全体論についてももう少し具体的に見てみる。例えば、ヒロアキが雨の日に傘をさして外に出かけるのを見るなら、濡れたくないという欲求や、傘をさせば濡れずにすむという信念を彼がもっていると考えるかもしれない。このとき私たちは、行為を合理的に説明してくれるような信念・欲求を行為者に帰属している。しかし、この信念・欲求ペアを帰属することは必ずしも正しくないかもしれない。というのも、行為を合理的に説明するような欲求・信念は無数にあるからである。例えば、紫外線を浴びたくないという欲求と、傘をささないと紫外線を浴びるといふ信念をもっていると考え（そして、先の解釈で帰属させた欲求や信念をもっていないと考え）たとしても、傘をさして出かけるというヒロアキの行為を合理的に説明することができる。これに対しては、ヒロアキがもっているはずの背景的な信念に依拠することで解決できると考えられるだろう。常識的に考えて、今雨が降っていることや、雨の日に紫外線はほとんどないとヒロアキが信じているはずなので、これらの背景的な信念をもつれば、後者の解釈は退けられ、ヒロアキが、濡れたくないという欲求や、傘をさせば濡れないという信念をもっているのだといわれるだろう。これらの背景的な信念は、傘をさせば濡れずにすむという

信念とは整合的であり、またその信念を支持するが、傘をささないと紫外線を浴びるという信念とは不整合であるから、前者の解釈が支持されるわけである。このように背景となる信念や欲求も含めて、根拠づけの関係や、整合性関係のような合理的関係にあるような信念・欲求が同時に特定される。そして、それらの背景的な信念や欲求も、それらと合理的関係にあるような態度と同時に特定されるという具合に、結局のところ、欲求や信念は、それらを一つずつ特定することはできず、互いに合理的な関係にあるような信念・欲求の体系全体として特定されるのである。<sup>3)</sup>

しかし、このように信念・欲求が全体論的に決定される構造にあるとすると、内容決定について説明することは困難な課題となるように思われる。ヒロアキのケースで見たように、行為者の背景的な信念に依拠してはじめて解釈が可能であったのだが、だからといってこの背景的な信念に依拠して解釈を始めることはできない。というのも、内容決定の問題に答えることが目的なので、行為者もつ背景的な信念がどのようにして決定されるのかということもまさに答えるべき問題に含まれているからである。1節でも述べたように、内容決定の問題に答えるためには、行為者の心について全くわかっていない状況、つまり、根元的解釈の状況を想定しなくてはならない。今雨が降っていることや、雨の日に紫外線はほとんどないとヒロアキが信じているという常識はここでは用いることができないのである。そうすると、まず、何によって内容が決定されるのか、という基礎に関する問題について説明される必要がある。人は普通これこれの信念や欲求をもっているという常識を用いることができないとき、行為者が行った一つの行為によって信念・欲求の体系全体を決定することはできない。<sup>4)</sup>では、行為に関するより多くの証拠に依拠しなければならぬのか、あるいは、また別の種類の観察可能なふるまいや態度に依拠しなければならぬのか。この点は明白なことではないように思われる。さらに、どのようにして信念・欲求の体系全体が決定されるのか、という決定方法に関わる問題を説明する必要がある。仮に、行為者のふるまいに関する多くの証拠が内容決定の基礎であると考えられるとしても、それらの基礎をもとにして、具体的には、どのようにして信念・欲求が全体論的に決定されるのかは、容易に説明することができないように思われるのである。

### 3. 意思決定理論を用いたアプローチ

これに対して、意思決定理論が、どのようにして信念・欲求が全体論的に決定されるのかという、決定方法に関する問題を説明するための良い見通しを与えてくれるという見込みがある。<sup>5)</sup> 以下ではまずこの点を確認していこう。同時に、意思決定理論に含まれる本質的な要素に、行為者の選好に依拠するという側面があることを確認し、そこに基礎に関わる問題が生じてくることをみる。さらに、デイヴィドソンがあたりうる問題点をどのように回避していくのかを見ていこう。

#### 3. 1 意思決定理論と内容の決定方法

まずは、内容の決定方法について、意思決定理論が良い見通しを与えてくれる点について確認する。意思決定理論は、行為者がどのような推論をもとに選択を行うのかを明らかにするものであり、それは同時に、行為者の選択や選好をもとにして、定量化された信念や欲求の体系を明らかにするものである。<sup>6)</sup> つまり選択についての理論であると同時に、信念や欲求についての理論として、どの程度の度合いで信じているのか、どの程度欲しているのかということも含めて、行為者がどのような信念と欲求をもっているのかを明らかにし、しかも特定の信念と欲求のみならず、信念と欲求の体系全体を特定していく方法を明らかにしているのである。

行為者もついているすべての選好をもとにして、信念と欲求の体系が具体的にはどのように決定されるのか。ジェフリーの理論 (Jeffrey (1983)) に依拠しながらこの点について見ていく。<sup>7)</sup> ジェフリーは、ある命題が真となることよりも別の命題が真となることを選好するという態度を取り上げる。任意の2つの命題間のこの選好から、すなわち、すべての命題について、それが真となることへの選好のランキングをもとに、すべての命題についての、信念の度合い (主観的確率) と欲求の

強さ（主観的な望ましさを）を決定していくのである。意思決定理論にはどの賭けを選択するかという賭けのあいだの選好に依拠するものもあるが、ジェフリーの場合はこのように命題を真とすることへの選好に依拠するので、選好のランキングは、期待効用のランキングではなく、命題が真となることの望ましさを（すなわち、命題が真となることを欲求する度合い）のランキングと等しくなっている。

さて、ある命題が真となることの望ましさを、その命題が真となるような各ケースの望ましさを、それぞれのケースが起こる主観的確率で加重平均したものとなっているはずである。これを反映した公理が、次の望ましき公理である（ $\text{Prob}(A)$ はAが起こる主観的確率を、 $\text{des}(A)$ はAの望ましさを表す）。

$\text{prob}(X \text{ かつ } Y) = 0$ 、かつ  $\text{prob}(X \text{ または } Y) \neq 0$  ならば、

$$\text{des}(X \text{ または } Y) = \frac{\text{prob}(X) \text{des}(X) + \text{prob}(Y) \text{des}(Y)}{\text{prob}(X) + \text{prob}(Y)}$$

望ましき公理が述べていることは、両立不可能な命題から成る選言の望ましさは、Xが真となるケースやYが真となるケース（これらは両立しない）の望ましさを加重平均であり、そのときの加重は、それらのケースが起こる主観的確率であるというところである。そして、 $Y = \bar{X}$  とすれば、 $(\text{prob}(X) + \text{prob}(\bar{X}) = 1$  なので) 望ましき公理から次の式が導かれる。

$$\text{des}(X \text{ または } \bar{X}) = \text{prob}(X) \text{des}(X) + \text{prob}(\bar{X}) \text{des}(\bar{X})$$

そしてここから、次の式が得られる。

$$\text{prob}(X) = \frac{\text{des}(X \neq \text{たは}\bar{X}) - \text{des}(\bar{X})}{\text{des}(X) - \text{des}(\bar{X})}$$

つまり、ある命題が真となることの主観的確率は、「論理的真理 ( $X \neq \text{たは}\bar{X}$ )」の望ましさとその命題の否定の望ましとの「間隔」と、「その命題の望ましさとその命題の否定の望ましとの間隔」の比となる。<sup>9)</sup>

さて、望ましさのランキングをもとにして、これらの間隔の比較をおこなうことが可能である。それゆえ、得られた式と望ましさのランキングをもとに、各命題についての主観的確率を比べることができる。例えば、二つの命題の望ましさが等しく(かつ、それらがともに論理的真理 ( $X \neq \text{たは}\bar{X}$ )) よりも望ましく、かつ、それらの否定の望ましさも等しい場合には、それらの命題は同じ確率をもたねばならない。同様に二つの命題の望ましさが等しく(かつ、それらがともに論理的真理 ( $X \neq \text{たは}\bar{X}$ )) よりも望ましく、しかし一方の否定の方が他方の否定よりも選好される場合には、前者の確率は後者の確率よりも低い。適切な存在公理を加えると、これで確率尺度を確立することができる<sup>10)</sup>、そうすればすべての命題の相対的な望ましさを確定することができる。

決定方法に関する以上の説明をまとめてみる。まず行為者のすべての選好がわかっているところから話をはじめ。すべての選好をもとにして、どの命題よりもどの命題が真となることを欲しているのか、あるいは同じくらい欲しているのかということが明らかになる。ただし、ここで判明しているのは、各欲求の強さの大小の順序を示すランキングだけであって、各命題が真となることをどの程度欲しているのかは特定されていない。そして、次に欲求の強さのランキングをもとにして、すべての命題について、どのくらいの度合いで信じているのかが特定され、それをもとにして、すべての命題について、どのくらいの強さで真となることを欲求しているのかが特定されることになる。これはまさに、信念と欲求の体系が全体論的



に決定される仕方についての説明となっている。

### 3. 2 未解釈の文に関する選好を基礎とする

ここまでの説明は、すべての命題について、それが真であるという信念や、それが成り立つことへの欲求がどのようにして決定できるのかを説明するものであった。かなり大雑把な説明ではあったが、詳細はここでは問題ではない。問題は、決定プロセスは全ての選好からスタートしているということである。このことはつまり、内容決定の問題に答える際に通常の意味決定論をそのまま用いることは、信念や欲求の内容は何をもとにして決定されるのかという基礎に関する問題に対して、選好をもとに決定されると答えることを意味する。この点において、意思決定論を用いるのは不適切であると言わざるを得ない。というのも、意思決定論で用いられる選好とは、すでに内容が特定されている命題間の選好であるからだ。選好はまさに命題的態度のひとつであるから、その内容が何によって、どのようにして決定されるのか、ということがそもそも説明されなければならないはずである。加えて、根元的解釈の状況で、行為者が何を選好しているのかを解釈者が直接観察することができると思われることもできないだろう。それゆえ、内容決定の問題に答えるうえで、内容が特定されている選好を基礎とすることは適切ではないように思われる。

これに対して、デイヴィッドソンは命題が真となることへの選好、すなわち、内容が完全に特定されている選好の代わりに、未解釈の文に関する選好を基礎とする<sup>(1)</sup>。それによって、内容を前提することなしに、信念や欲求を特定するために、意思決定論を使うことができるようになると主張する。ここでの未解釈の文というのは、それが文であることはわかっているが、その文が何を意味するのかが特定されていないような文である。例えば、スペイン語を理解できない私にとって「*Voy a las montañas*」は未解釈の文のようなものである。そして、解釈の基礎となる未解釈の文に関する選好とは、ある文が真となることよりも別の文が真となることを選好するという態度であり、このとき真となることを選好されている文は、解釈者が未

だ意味を特定していない文なのである。あるスペイン人が「Voy a las montañas」が真となることよりも「Voy al mar」が真となることを選好していると私が知ったとしても、私は彼がどの選択肢を選好しているのかがわからないように、未解釈の文に関する選好を基礎とすることは、選好の内容を前提としてしまうことにはならないのである。

このように、行為者の各文に関する選好を解釈の基礎とすることで、内容について前提することなしに意思決定理論を用いることが可能となるのだが、それだけで信念・欲求を完全に特定することができるわけではない。ここで得られるのは、各文について、行為者がどの程度の度合いでそれが真であると信じているのか、そして、どの程度の強さでそれが真となることを欲しているのか、という未解釈の文についての信念と欲求のみなのである。

ここから信念と欲求の内容を完全に特定するためには、さらに各文の意味が解釈される必要がある。意味の解釈は、行為者が、各文について、それがどの程度の度合いで真であると信じているかということをもとに行われる。ここでは、信念や、信念をもちうる主体であるための構成的な原理や、意味理論としてのタルスキ流の真理理論がもつ形式が制約原理となることで、解釈が行われる<sup>12)</sup>。意味の解釈方法についてはこの論文での主題ではないため概略を述べるにとどめるが、結果として意味が解釈されることで、信念・欲求の内容も完全に特定されることになる。そして同時に、選好の内容も特定される。

#### 4. 未解釈の文に関する選好を基礎とする内容についての評価

意思決定理論は、内容が全体論的に決定される方法についてうまく説明するものであるが、内容決定の基礎に関わる問題を抱えていた。それに対して、デイヴィッドソンは未解釈の文に関する選好を基礎とすることで、その問題を回避しながら意思決定理論を用いるやり方を提案した。このアイデアは巧妙なものではあるが、それでも内容決定の問題に答えるうえで選好が基礎となると考えることは適切ではないと思われる。

#### 4. 1 循環的な説明になるのでは？

まずは、未解釈の文に関する選好を基礎とすることについて、一見したところ問題に思われそうなポイントについて取り上げる。まず疑問に思われることは、それが内容に関する事実を含んでしまっているのではないかということである。というのも、選好の内容は、ある意味では特定されていないといえるが、またある意味では特定されているといえるからである。例えば、スペイン語がわからない私が、スペイン人のトーレスが「Voy a las montañas」が真となることよりも「Voy al mar」が真となることを選好していると知っていると、たしかに私は、それぞれのスペイン語の文が何を意味するかを知らないので、トーレスが何を選好しているかはわかっていないといえる。しかし他方で、私にとつては意味はわからないが、特定のスペイン語文「Voy a las montañas」が真となることよりもまた別のスペイン語文「Voy al mar」が真となることを選好しているということはわかっているといえる。その意味で、私は彼の選好の内容について知っているのである。つまり、文に関する選好は、その文がまだ解釈されていないものだとしても、あくまで内容を含んでいるものだといえる。そうすると、未解釈の文に関する選好によって命題的態度の内容が決定されるという説明は、結局のところ循環的な説明となっているのである。というのも、心的内容に関する事実が心的内容に関する事実によって決定されるといふ説明となるからである。

これに対してデイヴィドソンは、文に関する選好が内容を含んでいることを認めたくえで、それを用いて内容決定について説明することに問題はないと考える。そもそもデイヴィドソンは、志向的な概念を非志向的な概念に還元することができない<sup>13</sup>と考える。つまり、内容決定に関して説明する際に、内容を含んだ事柄に依拠することは避けることができないと考える。そのうえで、文に関する選好を基礎とすることは、内容をもった要素を基礎に含むことにはなるが、それは「理論が完成してはじめて明らかにになると期待される限りなく多様な命題的態度（信念や欲求、意図、意味すること）の識別可能性を前提しないような一つの態度から始めていることになる<sup>14</sup>」と言う。つまり、デイヴィドソンはそもそも、志向的な概念を非志向的な概念に還元すべきとは考えていない。むしろ、志向的な状態について可能な限り少ない事実をもとにして、残りの

より多くの志向的な状態について説明できればよいと考えたのである。

志向的な状態を非志向的な状態に還元できないのであれば、当然、非循環的な説明を与えることを目的とすることはできない。そのため、志向的な状態について可能な限り少ない事実をもとにして、残りのより多くの志向的な状態について説明することを、代わりの目的とすることは正しい方針であるように思われる。それゆえ、文に関する選好を基礎とすることは、循環的な説明を与えることになり、一見すると問題があるように思われるが、実際のところそれは問題ではないのである。

#### 4. 2 解釈者に利用可能なものではない

しかし、未解釈の文に関する選好を基礎とすることが適切ではないと考える理由が存在する。最後にこの点を明らかにする。

私たちは根元的解釈を通じて内容決定の問題に答えようとしている。そして、解釈の基礎は、解釈者が観察によって直接的に知ることができる事実でなければならない。つまり、解釈の基礎は、行為者が何を信じているか、また何を欲求しているかを知らず、なおかつ行為者が使う言葉の意味も知らない解釈者が、行為者を観察することで直接的に知りうるような事実でなければならない。デイヴィドソンは、意味と心的内容に関する説明を与えるうえでこの点を重視し、意思決定理論の意義について次のように述べる。意思決定理論は、「理論的な性格が比較的強い複雑な内包的概念を、公共的に観察可能な振舞いにいっそう直接的に適用できる内包的概念に還元するための重要な一步である」<sup>15</sup>。つまり、選好からはじめて信念や欲求を特定する意思決定理論の適用は、理論的性格の強い内包的概念、すなわち各命題に対する欲求や信念を、観察可能な振舞いに直接的に適用できる内包的概念、すなわち文への選好に還元することを意味するというのである。しかしながら、行為者がどのような（未解釈の文に関する）選好のパターンをもつのかということ、解釈者が、観察できる事実から直接的に知ることはできないように思われる。

デヴィッドソンは、どういった状況で、あるいは、どういったふるまいをもとにすれば、行為者の態度がわかるかということについて具体的なことは述べていない。行為者の態度に関するデータは、「任意のベイズ的意思決定理論の実験によるテストで通常集められるデータと同じ種類のものである」と述べるだけである。それゆえ私は、ありうる考えをいくつか想定し、それらがどれもうまくいかないことを示す<sup>17</sup>。

意思決定理論で典型的な例は、賭けを提示して、被験者がどちらに賭けるかを選択してもらおうというものだろう。「選択肢 A…サイコロの偶数の目が出た場合にそばが食べられる。選択肢 B…サイコロの奇数の目が出た場合にうどんが食べられる」という選択肢を提示して、選択してもらおうというものである。しかしながら、行為者の言語を解釈していない状況では、当然、行為者に賭けを説明して理解してもらおう術を解釈者にもたないのである。

では、よりシンプルな被験者の非言語的な行動を観察してどうか。例えば、目の前にうどんとそばが置かれている状況で、行為者がうどんを食べるといふ状況を想定してみよう。しかし、この状況を観察したところで、行為者が、どの文が真となることへの選択をもっているのかを知ることができない。というのも、このとき文に関わる情報は何も得ることができないからである。また、この方法には別の問題がある。それは、行為者が実際に真にすることができただけしか選択肢にさがってこないということである。例えば、行為者が雨を降らせることや、太陽を昇らせることはできないので、それらの事態に関わる態度については何もわからないことになる。しかし、心的内容を解釈するという目的のためには、それらの事態を表すような、より多くの文に対する選択関係を明らかにしなくてはならない。それゆえ、この方法は適切ではないということになる。

では次に、言語的なふるまいをもとに文への選択を知ることができるかを考える。おそらく、文への選択という態度を知るために必要な言語的なふるまいの候補として考えられるのは、提示された文の一方を選択するというふるまいとなるだろう。例えばそれは、一方の文を指さしたり、一方を手にとったり、または一方の文を読みあげるといふ行為かもしれない。

しかし、行為者が一方の文を指したという事実から、彼がその文が真となることを選択しているとみなすことはできないように思われる。というのも、その文が真となることを選択するから一方の文を指したのではなく、例えば、未来の事態について教えてあげようとして一方を指したのかもしれないからである。「雨が降る」と「晴れる」という二つの文を提示されたときに、晴れることの方がより望ましいと考えている場合でも、明日の天気を知られたと思って「雨が降る」を選択する場合があるだろう。行為者が提示された文の一方を指すとき、解釈者はその行為を、自身の選択を伝えることを意図して行われたと解釈することも、未来に起こりそうなことを伝えることを意図して行われたと解釈することも、また他のことを意図して行われたと解釈することも可能なのである。つまり、行為者の意図内容は、一方の文を指すというふるまいを見て直接的に知ることができるものではない。しかるに、行為者が自身の選択を伝えることを意図し（一方の文を指し）たということがわかることによつてのみ、行為者の文に関する選択を知ることができる。それゆえ、行為者の文に関する選択を、一方の文を指すというふるまいを観察して直接的に知ることができないのである。このように、言語的なふるまいとそうでないものを解釈者が区別できるとしても、その事実から、文に関する選択を知ることができないように思われる。

以上のように、行為者がどのような（未解釈の文に関する）選択をもつのかということ、解釈者が観察して直接的に知ることのできる状況を想定することはできないように思われる。それゆえ、未解釈の文に関する選択が解釈の基礎だと考えることはできない。そして、根元的解釈を通じて内容決定の問題に答えるという方針に従えば、未解釈の文に関する選択が内容決定の基礎となると考えることはできないということになる。

## 結論

内容決定の問題には、命題的態度の内容は何よつて決められるのか、という基礎に関する側面と、どのようにして決定さ

れるのか、という決定方法に関する側面がある。意思決定理論は、決定方法を理解するうえで役に立つ。しかし、選好を基礎だと考えることには問題がある。デイヴィドソンは、未解釈の文に関する選好を基礎とすることで問題を回避しようとしたが、結局のところそのやり方でも、選好を基礎とすることは適切ではないことが明らかになった。それゆえ、選好を基礎とみなすのではなく、選好の内容を決定するようなさらなる基礎が探し求められなければならないように思われる。

## 註

- (1) Davidson (1974b), Lewis (1974).
- (2) Davidson (1975), p. 158-159. Stalnaker (1984), p. 17-18. Crane (2015), p. 33-37.
- (3) Davidson (1970), p. 221; (1975), p. 157, 168.
- (4) また、行為自体もその内容を特定する方法を明らかにすべき対象であることに注意しなければならない。というのも、信念・欲求によって合理的に説明される対象は、意図的な行為であり、どのような意図で行ったのかを特定することは、まさに心的内容を特定することだからである。それゆえ、どのような意図でその行為を行ったのかがわかっていると想定で話を始めることもおもしろいことにも注意しなくてはならない。
- (5) Davidson (1980b), Lewis (1974), Dresner (2014) も同じように内容の決定方法について説明する際に意思決定理論を用いる。
- (6) ついで念頭においているのは Ramsey (1950) や Jeffrey (1983) が与えたベイジク的意思決定理論である。
- (7) ただし、意思決定理論のテクニカルな部分について議論することがこの論文の目的ではないため概略的な説明に留める。
- (8) Jeffrey (1983), p. 80-81.
- (9) Jeffrey (1983), p. 114-115.
- (10) Jeffrey (1983), p. 113-115.
- (11) Davidson (1980b), p. 157-158.

- (12) Davidson (1980b), p. 153-158.
- (13) Davidson (1970), p. 216-217. (1980b), p. 152.
- (14) Davidson (1980b), p. 155. デイヴィッドソンはこの箇所において、直接的には、ある文を真とみなすという態度を基礎とすることに關して言及しているが、文に關する選好を基礎とすることに関しても同じことがいえる。
- (15) Davidson (1980b), p. 154.
- (16) Davidson (1980b), p. 261.
- (17) このような候補がありうるかどうかという点については竹村 (2018) を参考にした。

### 参考文献

- Crane, T. 2015, *The Mechanical Mind: A Philosophical Introduction to Minds, Machines and Mental Representation*. Routledge, 3rd.
- Davidson, D. 1970, "Mental Event", In Davidson 1980a, pp. 207-227.
- Davidson, D. 1973, "Radical Interpretation", In Davidson 1984a, pp. 125-139.
- Davidson, D. 1974a, "Belief and the Basis of Meaning", In Davidson 1984a, pp. 141-154.
- Davidson, D. 1974b, "Replies to David Lewis and W. V. Quine". *Synthese* 27 : 345-349.
- Davidson, D. 1975, "Thought and Talk", In Davidson 1984a, pp. 155-170.
- Davidson, D. 1980a, *Essay on Action and Event*. Oxford: Clarendon Press.
- Davidson, D. 1980b, "A Unified Theory of Thought, Meaning and Action", in Davidson 2004, pp. 151-66.
- Davidson, D. 1984a, *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press.
- Davidson, D. 1984b, "Expressing Evaluations", in Davidson 2004, pp. 19-37.
- Davidson, D. 2004, *Problems of Rationality*. Oxford: Oxford University Press.



- Dresner, Eli. 2014, "Decision Theory, Propositional Measurement, and Unified Interpretation". *Mind*, 123, 491, pp. 707-732.
- Giler, K. 2011, *Donald Davidson. A Short Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Jeffrey, R. 1983, *The Logic of Decision*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Lewis, D. (1974), Radical interpretation. *Synthese* 27, pp. 331-344.
- Ramsey, F.P.1950, "Truth and Probability" in *The Foundations of Mathematics*, New York.
- Stalnaker, R. 1984, *Inquiry*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 竹村和久 (2018) 「意思決定研究と実験法」基礎心理学研究 36 (2)、『日本基礎心理学会』
- (九州大学大学院人文科学府博士後期課程)